

NO FENCE

vol. 35 2015年7月

〒102-0093 千代田区平河町1-5-7-203

nf-staff@netlive.ne.jp

<http://nofence.jp/>

国思考でなく、市民連帯思考で

‘15, 5, 13 (NO FENCE主催) 池明観先生講演報告

“T.K. 生 (池明観) 氏が語る東アジアの「いま」”と題して約1時間半語っていただいた内容の骨子は、簡潔に記せば以下の通りである。

一、南北の民族は同じ民族、政治を抜けば同じ人々

南北は政治体制が違うから違うように見えるが、政治を抜けば同じ人々。ただ南は国際的に開かれている。北は国際的に開かれていない。これが一番の違い。

二、東アジアに普遍的思想を作り上げねばならない

1999年日本の歴史教科書改訂問題で交流は韓国と日本の交流は中断したが、交流は続けなければならない。東アジアから普遍思想が無くなったのはいつからか。1798年本居宣長は『古事記伝』(44巻)を完成させた。近世に新神話時代を作り、国粹思想を形成した。こういう東アジアの思想の違いを乗り越えて、普遍的思想を作り上げていく必要がある。私は丸山真男に注目している。彼は内側に身を置きながら(日本人であることを自覚しながら)、少しでも外への視点を延ばし、コミュニケーションを続けていく。アメリカに戻ったら(注、池先生はここ3年アメリカに在住)、丸山真男の作品をじっくり読もうと考えている。

三、これからは第三期の70年

東アジアの(近)現代史を見ると、1945年を境に、それ以前は1868年(明治維新)から77年(第一期)、それ以後は今年まで70年(第二期)、これからは第三期に入る。横の軸(世界は一つである。東アジアは一つである)と縦の軸(国民の力が増大する。政治力は後退する)が織りなしていく。日本

は既成勢力が保守的、韓国は既成勢力が進歩的。国民は常に野党を支持してきた。しかし最近4月の総選挙（補選）で与党が圧勝し、始めて韓国は国民の多数が中産階級になった。これからはアジア隆起の時代。これから日本は世界をどう生きていくのか。

四、山の中腹まで畑、北の人々は友

2003年KBSの理事長として北を訪問（金大中時代）。一切ホテルに閉じこめられた。私は1947年北に絶望にして南下した人間。当時日本統治時代の同僚教師中の一番の悪が朝鮮労働党党员になって横暴を振っていた。2003年妙香山に案内される途中、山の中腹まで耕されているのを見た。（食糧難で必死の民を見て）今まで北を敵だと思ってきたが、これからは友人と見ようと思った。ドイツの東西統合以上の嵐が吹き荒れるであろう。しかし大事なものは人命である。一人の命も損なうことなく統一を果たさねばならない。

T.K.生として「韓国からの通信」を連載していた時、「北の問題には触れない、今は南だけの問題と闘う」という方針を『世界』の編集長安江良介さんと決めた。朴正熙が反対勢力を全て共産勢力として弾圧していたので、彼に利用されることを恐れたからである。北に問題があることはわかっていたが、北の問題も扱うと南の問題も相対化されることになる、それを恐れた。

六、先統一後民主ではなく、先民主後統一

政治勢力は信頼できない。国単位で考えると争いは止まない。市民の連帯、市民のフラタニティー（fraternity 協同）で行くべきだ。21世紀はそういう時代だ。民主化された以上は、分裂してはならない。過去をなじって人を殺してはならない。」

私（小川）のメモによれば、質疑応答も含めた講演内容の骨子は、以上である。北朝鮮への言及が少なかったので、会場から鋭い質問が二三出て、辛うじてTK生（池明観）氏の北朝鮮認識が補われた形になった。北朝鮮の人権問題解決でTK生氏が何を語るかに関心を持って参加された人には不満の残る講演内容であったかもしれない。私自身の感想は、翌日に認（したた）めたものを以下に記すことにする。ただ池先生の友人（クリスチャン、教え子）、マスコミ陣、岩波書店からは『世界』の編集部を中心に3名の方が参加され、水曜の夜にも拘らず、60余名の方が参加して下さった。TK生氏効果が示された集会であった。90歳という歳を感じさせないスケールの大きい講演であったことは確かだ。NO FENCEが主催できたことにも感謝したい。（文責、小川晴久）

〔感想〕北のことを取り挙げなかった方針の根拠と

その後遺症

代表 小川 晴久

岩波書店の『韓国からの通信』（第一冊目）を読んで、昨日の講演でTK生（池明観）氏が明らかにされた当時の戦略的方針の根拠がよくわかった。朴正

熙が学生たちの「改革や民主主義と自由の要求」を共産主義（者）とし、北の指令に基づくものとして徹底して弾圧している状況では、朴正熙に利用されるだけと考え、南の問題だけに集中したのだという。南はキリスト教を介しても国際社会に開かれていたので、この集中は実を結び、韓国の民主化は達成された。しかし後遺症は残った。北に対する認識は貧しくなり、北の問題は取り挙げないという後遺症が残ってしまった。これは決定的にマイナスであった。

南が民主化された今、これからは北の民主化に取り組み、集中する番である。すでに南が民主化されて二十余年経つが、この二十余年間に北の人権改善運動も国連を大きく動かす所まで来た。国連の北朝鮮人権報告書（COI報告）も出て、北の人権侵害は北の国内全域に亘っていることが明々白々にされた。しかし昨日の講演ではそのご指摘はなかったが、先日（4月25日）私個人に仰って下さったことは、もっと大きな運動が必要であるということであった。良心的な人々の立ち上がりが必要だと。

TK生として十五年も韓国の民主化運動の内実と向き合わせ、それを記録し発信し続けたTK生氏としては、北の民主化運動はまだ迫力にかけるといえるであろうか。実際遅まきながら『韓国からの通信』（岩波新書、4冊）を読んでみて感じたのは、物凄い闘いであったことである。まともな発言を共産主義（アカ）呼ばわりしてやたらと逮捕し、CIAのすごい拷問で半死においやる。それにもめげずに闘う学生たちの不屈の代（だい）を継ぐ闘い、このような闘いが、北に対してはこれから求められる。TK生（池明観）氏の今回の来日は、それを告げるための啓示であるかもしれない。『韓国からの通信』はそれ位物凄い闘いであり、その記録である。在庫切れになっている同書の再生の時である。TK生氏は九十歳になられていた。九十歳までお元気でいて下さり、来日の機会に私たちの求めに応じてこのような感想と助言を述べて下さった。『韓国からの通信』を読む機会を与えて下さった。感謝である。

2015. 5. 14 午後 識（しる）す。

眼からウロコ！ H.G.ウェルズ翻訳家 浜野 輝さん のお話を聴いて

パクホミ

小川先生の提案で、6月7日(日)午後、平河町のNO FENCE事務所に浜野 輝さんにお越しいただき話を聴いた。H.G.ウェルズを読んだこともなく、浜野 輝さんがどんな人物なのかも知らなかったもので、お会いする前日にネットで検索し、「日本国憲法の産みの親はH.G.ウェルズである」と浜野さんが熱く語っている動画を見つけビックリし直接お話を聴けるのを楽しみにしていた。

現在87歳で耳はかなり遠くなり、こちらの言うことは耳元で言わないと聞かれないようだったが、浜野さんの持論を語る声は力強く、その内容のスケールの大きさと衝撃度に圧倒された。日本国憲法の前文を中学の社会の授業で暗記

して以来、それを念仏のように暗唱してきた私としたことが、そのオリジンを全く知らなかった！

1933年12月にF.ルーズヴェルト大統領が初めてH.G.ウェルズに手紙を送り「あなたの論文が気に入って高く評価している。ぜひお目にかかりたい」という内容を書き、それに対する返信として1934年4月にウェルズが「私もあなたとお話ししたい。4月末にワシントンに行くから会いたい」という手紙を書いており、実際にふたりはこの後、3度も会っている。その後交わした往復書簡を見ても、ウェルズが人権宣言の必要性和草案を示し、それをもとにルーズヴェルトが1941年の「4つの自由宣言」（言論と表現の自由、信仰の自由、欠乏からの自由、恐怖からの自由）を発表し、そこから世界人権宣言も日本国憲法も生まれたというのである。やれ押し付け憲法だ、GHQ憲法だのとやかく言われていたが、H.G.ウェルズというイギリスの大文豪とルーズヴェルト大統領の思いがそのオリジンだったとは！その明々白々な証拠の往復書簡はアメリカのルーズヴェルト大統領記念図書館とイリノイ大学図書館 H.G.ウェルズ記録保管所があり、イギリスの H.G.ウェルズ研究家たちも知らずにいたのを浜野さんが明らかにして本国の H.G.ウェルズ協会に絶賛されたという。

日本の憲法学者にもその事実を何度も伝えたが、ほとんど無視されたため、現在も日本国憲法のルーツが知られないままなのだと言っている。これからは高齢の浜野さんに代わって遅まきながら真実を知った私たち若い世代の責任だと思う。ぜひ、多くの方に浜野さんの本や H.G.ウェルズの本を参照していただきたいと思う。私もこれから読もうとたくさん購入したが、時間がなくてなかなか読めないのが実態だが・・・。



世界の動き

第556回ザルツブルグ・グローバル・セミナーで 北朝鮮の人権問題取り挙げらる

2015年6月2日～6日 オーストリア ザルツブルグで

韓国の北韓人権市民連合のホームページで知ったニュースですが、1947年から始まっているザルツブルグ・グローバル・セミナーの第556回のセミナーでCOI報告書を作成した3人の委員カービーさん、ダルスマンさん、ビセルコさんが招かれ、北朝鮮の人道犯罪をテーマとするセミナーが開かれたことを知りました。6大陸から各界の人々が多数招かれ、COI報告に理解を深め、以下のようなことが議論され、ステートメントが発表されたということです。15項目あります。

- (1) 北朝鮮の人権状況の国際刑事裁判所への送付を国連安保理に再び呼びかける
- (2) 北朝鮮政府に自国民を“保護する責任“(2005年採択)の履行を強く促す
- (3) UN高等弁務官室ソウル事務所開設をサポートする。
- (4) COI報告の勧告の実践を各国政府は勿論あらゆる国際組織に促す
- (5) COI報告の各国語への翻訳を促し、報告内容を世界に広める
- (6) 若い世代に北朝鮮の人権状況を知らせる(特に韓国の青年たちに)
- (7) ラジオを使って多くの情報を北朝鮮内部に広める
- (8) 地球の南の市民社会に北朝鮮の人権問題に取り組むよう促す
- (9) 北朝鮮の難民の国際的救援の促進と強制送還の阻止
- (10) 北朝鮮難民の能力の向上と彼らの訴えを援けること
- (11) 行方不明者や被拉致者の問題に取り組むこと
- (12) 国際法の適用可能な北朝鮮の人々や機関の為に、世界の裁判所や法律機関の利用を検討すること
- (13) 北朝鮮に関する更なる研究：統治機構、権力機構の部署内の諸個人、そして弱いグループ(子供や女性、老人たち)の取り扱い
- (14) 人(people)対人(people)の交流の促進、国連親善大使と提携して。
- (15) 北朝鮮の海外派遣労働者の処遇に注意を向ける。国際的な労働基準、奴隷労働禁止の基準で。

以上15のうち、5, 6, 8が特に注目されます。私(小川)は今回初めてザルツブルグ・グローバル・セミナーの存在を知りましたが、歴史のあるこのセミナーで、以上のことが議論されたということは、とても心強く思いました。SALZBURG GLOBAL SEMINARをネットで検索してみてください。(文責 小川 晴久)

UNソウル事務所開設さる 6月23日

所長はデンマーク人Signe Poulsen (シネ ポールスン) さん

国連人権高等弁務官ザイド・ラード・アル・フセインさんが6月22日から25日までソウルを訪問した。目的は北朝鮮人権問題国連ソウル事務所の開設と韓国の人権問題議論の二つ。私たちに関心のあるのは第一の目的。COI報告に基づく後継事務所がソウルに開設されることが決まっていたが、滞在中の6月23日開設された。新聞報道によれば、初代所長はデンマーク出身のシネ・ポールスンさん、職員は5人位。ポールスンさんの就任は8月という。国連人権高等弁務官室のホームページを見ると、25日の記者会見冒頭のフセインさんの挨拶が紹介されていた。英文のかなり長いものである。それを読むと北朝鮮の劣悪な人権状況の認識がかなりしっかりとしていて、役職上当然であるが、その風貌と共に好感が持てた。

挨拶の最後は3人の元従軍慰安婦との会見が語られた。韓国訪問の第二の、目的に関する報告の一部になっていることがわかり、得心したが、元慰安婦の生々しい訴えは日本人全体が聴くべき内容であった。ウィークデイには15回、週末には一日に50回もレイプされたという。初代所長のシネ・ポールスンさんは女性らしいが、詳しいことがわかったら、又会報でお知らせする。事務所のホームページはseoul.ohchr.orgである。(小川)



ザイド・ラード・アル・フセインさん(ソウルにて)

会計より

会費納入
ありがと
うござい
ます。6
割の方が
払ってく
ださいま
した。あ
と4割の
方、よろ
しく。

饥荒的实际状况

下面从国联的报告中介绍两篇关于 90 年代饥荒实际状况的证言。

「有一个女人对发生在 1995 年以后的咸镜南道的食粮状况，作了以下证言。她的父亲在 95 年 2 月去世，姐姐和妹妹也因为营养失调饿死了，她说：“姐姐临死时的愿望是能够吃一碗乌冬面，但是没有钱买，姐姐是在 97 年饿死的。一个月后妹妹也饿死了，妹妹的临终愿望是能够吃上一块面包。弟弟从 1995 年起在 Koowon 煤矿工作，因为身体太虚弱，被开除了，在返回老家的列车里，因为营养失调饿死了，我找到了他的尸体。」

「在华盛顿的听证会上，赵 Jin-hye 对由于 90 年代的饥荒，她和家人陷入营养失调的状况作了证言。她的两个弟弟和祖母饿死了。“弟弟出生的时候，妈妈因为营养失调没有奶水喂他，祖母想把这个婴儿杀了，母亲恳求她不要杀了孩子。我必须得照顾婴儿，背着他在街上走来走去，祖母有时为了不让弟弟哭，也抱着他走来走去。但是因为沒有吃的，弟弟不停地哭，他在我的怀里饿死了。因为一直都是我在抱着他，弟弟把我当作了妈妈，我给他喂水的时候，他有时会盯着我，脸上露出微笑。”

摘自 2014 年 2 月 17 日的 UNCOI 的报告书

飢餓の実態

1990 年代の飢餓状況を示す証言を、国連報告書から 2 つ紹介する。

「ある女性は、1995 年以後の咸鏡南道の食糧状況について述べた。彼女の父は 1995 年 2 月に亡くなった。姉と妹も栄養失調で亡くなった。『姉が死ぬまぎわに願ったのは、うどんを食べることでした。でも、うどんを 1 杯、買うお金もなかったのです。1997 年に姉は亡くなりました。その 1 か月後に妹も死にました。妹の願いは、パンを 1 枚食べたいということでした。弟は 1995 年からクウォン炭鉱で働いていましたが、体が弱すぎてクビになりました。家に帰ってくる列車の中で、栄養失調で死にました。私は彼の遺体を見つけました』」

「ワシントンでの公聴会で、趙ジンヘさんは、1990 年代の飢餓で彼女と家族が体験した栄養失調について語った。2 人の弟と祖母が、飢えて亡くなった。

『弟が生まれたとき、……母さんはあまりの栄養不足で母乳が出ませんでしたので、祖母は赤ちゃんを殺そうと思いました。母さんは「どうか赤ちゃんを殺さないでください」と祖母に懇願しました。……私は赤ちゃんの世話をしなければなりません。おんぶして街を歩き回りました。祖母もときどき、赤ちゃんを泣きやませるため、抱っこやおんぶをして歩かないといけなくなりました。でもさっき言ったように食べ物がないので、弟は泣きやみませんでした。……食べるものがなくて、弟は私の腕のなかで死にました。いつも私が抱っこしていたので、弟は私をお母さんだと思っていました。だから、私が水を飲ませてやると、ときどき私を見つめて、ほほえむことがありました』」

待望の中国語訳成る！

水しかなかった赤ちゃんの死と微笑

昨年二月十七日発表の国連北朝鮮人権問題調査委の報告書

(COI 報告) の中に餓死していった子供たちの事例がある。

悲惨な実態は大陸の中国人たちにも知ってもらわなければと、中文訳を求めていた。それが実現した。右の日本語訳は

小川著『北朝鮮の人権問題にどう向きあうか』38と39頁。

上記はその中文訳。友人の訳者に感謝である(小川晴久)。

前掲の報告記事にもあるが、6月7日の世話人会議の後半に浜野輝氏をお招きして氏のお話をうかがった。以前に一度NO FENCE集会でお話をうかがったが、その時は15分くらいしか時間を差し上げられなかったもので、今回はたつぷりうかがおうとしたのである。しかしご高齢でもあり、世話人だけで先ずと考えた次第である。以下は縦書きで恐縮であるが、拙書『北朝鮮の人権問題にどう向きあうか』の98～101頁である。ご参考までにここに掲載させていただく。(小川 晴久)

■H・G・ウエルズの人権思想

次の契機はH・G・ウエルズとの出会いであった。

ウエルズが1913年に書き1914年早々に発表したSF小説『解放された世界』の岩波文庫版が、1997年8月に出版された。私は岩波書店の友人から偶然、この本をいただいた。

この小説の内容もさることながら、巻末に付された訳者・浜野輝氏による長い解説が、私の目を引いた。「ウエルズと日本国憲法」と題されていた。私が浜野氏に導かれてわかつたのは以下のことである。

ウエルズは大学で理科系の勉強をした生物学者で、文筆家として生計を立てていた。1914年に発表したSF小説『解放された世界』で、1956年にヨーロッパで核戦争が始まるという想定をした。小説発表当時はまだ原子爆弾はつくられていなかったため、後にアメリカで原爆がつけられ広島・長崎でそれが実際に使われて、世界はウエルズの先見の明に驚かされることになる。それはともかく、ウエルズは、この小説を発表した年に第1次世界大戦が勃発したことに多大なショックを受け、戦争をなくすには何が必要か、真剣な探究に進む。

第1次世界大戦の後にできた国際連盟もウエルズの構想のひとつであったが、アメリカやソ連が参加しなかったことに失望し、彼は世界の歴史の勉強に取りかかる。『世界文化史』に関する著作はその成果である。戦争をこの世からなくすには何が必要なのかを必死に考えつづけ、人類史の叢智の結晶を経てついにそれが人権の思想であることにたどり着いた。それが『人間の権利』(1940年)である。後の世界人権宣言の母体になる人権宣言(全10か条)を解説したものである。

彼は世界の3大指導者であるルーズベルト(アメリカ)、チャーチル(イギリス)、スターリン(ソ連)に手紙を書き、人権の大切さを訴えた。アメリカに飛んでルーズベルトには3度(1934年、35年、37年)会っている。

そしてルーズベルトは1941年1月6日、4つの自由(言論の自由、信念の自由、恐怖からの自由、欠乏からの自由)に関する有名な一般教書演説をおこなう。

人権条項の豊かな日本国憲法の産みの親はアメリカのルーズベルトおよびニューディール派と一般には解されているが、正確には産みの親はウエルズ(イギリス)とルーズベルト(アメリカ)だと解すべきである。

ルーズベルトは1945年4月に急逝してしまいが、1948年12月10日に国連総会で採択された世界人権宣言は、ルーズベルト夫人(エレノア)が委員長を務めた人権委員会が起草したものである。世界人権宣言の産みの親も、ウエルズとルーズベルトと言つてよい。